



厚生省課長補佐が札幌に  
来た。仕事である。打ち上  
げの午後、札幌市担当局職  
員が接待をした。その課長  
補佐氏が感動した札幌土産  
が三つあった。大倉山ジャ  
ンプ場の上から見た札幌、

ゴムタイヤの地下鉄、もう一つが藻岩山観光道路での  
キタキツネとの遭遇であった。

観光道路沿いに「キタキツネが出ますから注意して  
下さい」という立札を読んだ課長補佐氏は、

「キツネも人を襲うんですか」

と市職員に問うた。立札の字句を「ヒグマに注意」  
と同じ意味に理解したらしかった。

先に走っている自動車が、やがて徐行を始め、二匹  
のキタキツネが道路沿いでエサをもらっていた。一匹

の前脚がビッコであり、交通事故のせいと思われた。  
東京の課長補佐氏が藻岩山のキタキツネに感動した

理由は、いくつか想像できるが、最大のものは、百五  
十万人都市の、ススキノから、自動車でももの三十分

も走らないところに野性のキタキツネが生息して、人  
間に比較的馴れていたことであろう。山に行つてキツ

ネと出会うことに不思議はないが、大都市での遭遇は  
意外性を伴って感動を呼ぶものである。

そのキタキツネを身近かな動物に仕上げたのは網走  
に近い小清水の竹田津実さんだろう。流水のオホーツ  
ク海を背景として繰り広げられるキタキツネ母子の子  
別れの儀式などに日本人は感傷的になる。「…素晴らしい映画でしたね」と感動している人達に「あれはホルモンの作用じゃないですか」などと水をかけるつもりはないが、野性動物たちの子別れが、母親の性ホルモン、つまりは、一定の子育てが終わったことを告げ、神のおぼしめしによって再び、母から女(雌)へと戻ってゆくための儀式であることは知っておきたい。

北海道に三十を超える大学がある時代だから人間の  
子別れを大学卒時と、仮りに設定すれば、この、およ  
そ二十年間に子別れのための教育をしておかなくては  
ならないのだが、ヒトの社会は、キタキツネの社会ほ  
ど生物としての引き継ぎ業務が上手にいつていない。  
それが、いうところの非行であろう。非行が性行動と  
深くかかわっていることを考え合わせると、社会問題  
となつてい非行の根っ子が、ヒトの出産後性解禁が  
早いことと関連性があるのではないかとも思える。

そのキタキツネが、あたかもペット動物並みに取り  
扱われ始め、エキノコックスに苦勞した道立衛研は氣  
をもんでいる。エキノコックス宿主が何もキタキツネ  
に限らないこと、イヌ、ネコも宿主になり得ること等  
は、よく理解できるし、親しい付き合いをしている竹  
田津実さんがキタキツネ犯人扱いに口をとんがらかす  
心情も、これまた理解できる。ただ、上・下水道普及  
一〇〇%に近い札幌はともかく、そうでない地方都市  
では、やはり要注意であろう。野生動物が持っている  
病気の恐しさを一番良く知っているのは、動物園関係  
者、獣医だが、一方では四四四の超ミニ赤ちゃんが  
誕生できるほど医学が開発され、比例して人間が抵抗  
力をどんどん失っていることを考えると、「うちのキツ

ネは大丈夫」という論理も成り立ち難かろう。  
ところで、今日ほどペット動物の種類がたくさんい  
る時代はかつてなかった。ワニやヘビまで飼育してい  
る。ワニのエサは何か、と聴けば「ドジョウ」と即答  
がある。「カエルは、マグロの刺し身がいい」なんて  
話もある。これを生活のゆとりだなどという気持ちは  
持ち合わせないけれども、物資過剰・時間過剰の時代  
にさしかかって、その剰余の使い道に迷っている結果  
ではないかと思う。

例えば、こんな風景に、いま札幌市民が出会つたら  
どうだろう。戦後、どうにか生活が落ち着き始めた頃、  
イヌ殺しのおじさん達がみせてくれたあの名人芸、野  
良イヌたちを捕獲道具の針金の輪で、あつという間に  
捕獲しては、リヤカーに放り投げた早業、あれを、い  
ま札幌でやつたら市役所の電話は鳴りつ放しだろう。  
しかし、ほんの三十年前には、イヌ殺しは、当り前の  
街の出来事だった。動物愛護だなんて言葉すら新聞に  
はなかった。それが、いまはどうであろうか。やはり  
動物愛護とかペット愛好家の増加は、物質文明の裏う  
ちがあつてこそ成り立つものなのようである。

札幌のある医大附属病院看護婦出身のススキノ・マ  
マで、ネコを八匹とか飼育して有名な女性がいる。タ  
クシー運転手仲間では、ちよつとばかり知られたママ  
だが、その運転手氏が、こう嘆く――「ご指名で呼んで  
くれるのはありがたいのだが、道端にネコが歩いてい  
たりすると、車を降りて、持ち歩いているエサを与え  
にゆくのに、まいてしまふ。それが、結構、長い  
ことかまつてやるもんで、待ちくたびれてしまふ」。

ネコ八匹とは大世帯だが、エサ代が大変だろうに、と他人ごとながら心配になる。

ワニ、ヘビを家庭で飼育しているからといって、この家の主人、奥方を動物愛好家とはいわないまでも、それがイヌ、ネコとなれば「あそこの奥さんは、動物好きなんですよ」という。おおむね、こういう家庭では、子供に恵まれていないようであるが、これが動物愛護か、といえは、そうではない。

「日本は動物を虐待する」とは、例の日英イヌ戦争の際、日本の新聞が英国人の尻馬に乗って、せっせと書いた文章だが、これなどカルチャー・ギャップ以外の何ものでもない。いまは、イヌ戦争が終わって、クジラ戦争の時代であり「ススキノに、うまいクジラの尾の味を食べさせる店があるよ」「近所のスーパードも売っているよ」などという会話を聴かせたら英国人は頭に血がのぼるだろう。

スジコ、タラコ、カズノコ果ては、トビッコ、シシヤモッコミスーパーに並んだ魚卵だけを拾い上げて、これだけある。日本人が、世界一の魚卵食いであることは改めていうまでもないが、資源論争をやったら、魚卵食いほど都合の悪い立場はない。しかし、海洋立国日本は、二千年の間、日常食べて来たものを英国人がとやかくいったからといって、止める訳にはいかなからう。その英国人が、最近、禁狼のツグミの焼鳥をイタリアあたりから輸入して食しているという話もあるし、事実、酒のサカナとしてのクロググミほどおいしいものはないらしい。

日英イヌ戦争の原因は、まことに単純なもので、飼

育しているイヌが不要になったら保健所などで殺処分する英国と、転勤などで不要になったイヌを、かわいそうだからといって放置、野良イヌになっても自活してゆけよ、と願う日本の差に過ぎない。家庭で飼育している牛、豚を、冬が来る前に家族総出で殺し、食糧として貯える国民性と、家で飼っていたものならニワトリすらも食べようとする国民性の差を、どっちが正しいか、などと議論してみたところでラチがあくまい。かわいいから捨てるんですという論理がキリスト教社会で通じる筈もないのである。

シベリア鉄道に乗ると、沿線農家に北海道では見られない風景がある。農家や畑に、丈の低い板べいがあり、それは放し飼いにしている牛、アヒルなど家畜にヒマワリ畑が荒らされたりしないためである。北海道では、牧場にサクをまわすがシベリアは畑にサクをまわす。目的は同じなのに、これだけの違いがあり、これらを背景として育つ文化・民族性に埋め難いギャップが生じるのも、また止むを得ぬことであろう。

タロ、ジロを主役にした南極物語が、本に映画にと大流行だ。あの時、二頭のイヌを重量制限のために極地に放置して帰国した際、犬飼哲夫先生はじめ関係者のところに「なぜ、お前が身替わりにならなかつたのか」という電話、手紙が殺到した。こんな世相は恐らく英国にはないが、日本には生きている。そして、また「かわいいネコちゃん」などと、頼ずりする心理も、これに似ている。

「しかし、彼等には強烈な利己主義があるために、特に彼等を崇拜する女達によって甘やかされたことが

上品振った性格を益々増長せしめ」と書いたのは「家畜系統史」のコンラット・ケルレルだが、ここに登場する彼等とはネコである。札幌の書店でもネコ・アルバムがたくさん並んでいるが、イヌのそれは多くはない。ネコは良く売れるのだそうである。そんな中で、カラフト犬ならぬサモエドの代役ではあるが、タロ、ジロものが良く売れているのは、何やら一矢報いた気分になるのは、あながちネコ嫌いだからばかりではない。

それは人類進化の過程でイヌほどヒトに役立って来た動物はなく、これに比べ、上品振ったネコたちの貢献が少なかったからだ。探検の時代に極地でソリを引いた極地犬たちは、ある時は人間の食糧として役立った。この時代の日本人に極地探検が不向きだったのは、ソリ犬たちを殺して食べることができなかったからである。英国人に極地探検家が多いことと、先の日英イヌ戦争の経緯を突き合わせると、その辺の事情が呑み込めるはずである。

しかし、道民の大先輩に当たるオホーツク文化人たちは、相当量のイヌを食べていたことが明らかであり、それが源頼朝が鎌倉幕府を開いた頃だと知ると、民族の違いとは、根深いものだと思わざるを得ない。

さて、円山動物園や道自然保護課が困ってしまうのは、「ヒナを保護してほしい」という持ち込み。南区でアカゲラのヒナを飼育していた主婦もいたが、動物をペットにするなら英国式飼育法を身につけるべきである。

(北海タイムス編集委員)